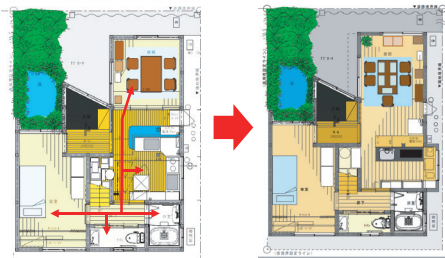


「P-1グランプリ」。それはリフォーム実績年間2万件以上を誇るパナソニックエイジフリーの社員が、「プランナー」としての人間力、「プランニング力」「プレゼン力」を競い合う、年に1度の社内コンテストだ。2024年1月23日、第23回が開催され、パナソニックエイジフリー近畿リフォーム課の坂東千津さんが発表した『Que Sera, Sera (ケセラセラ)』が金賞を受賞。要介護になった夫（Kさん）の介護者である社交的な妻（Iさん）が、好きな料理や趣味を心から楽しめるようにリフォームした事例だ。

ご夫婦の暮らし自宅は築50年以上の木造2階建て。2人揃って料理好きで、夫のKさんも要介護状態になる前はよくキッチンに立っていた。妻のIさんは社交的な性格で、ちょくちょく友人を招いてお茶会などを開いていた。そんなことからそれぞれが好きなた料理ができるよう、キッチンにはシンクが2つあり、たくさんの調理道具が所せましを置かれているような状態だった。

しかし、Kさんが要介護となってから徐々に、介護者となったIさんがふさぎこみがちになってきたことを、Kさんの担当ケアマネジャーが心配したことからリフォームの依頼に。坂東さんがアクセスメントにうかがうと、Kさんは自宅内は伝い歩きで移動ができ、料理をすることはできなくなったが夜中にキッチンに入って物音を立てることなどがあった。そのため、Iさんは心配で睡眠が十分に取れず、コロナ禍も重なって以前のように友人たちと集うことがまもなくなくなっており、自分の食事



Before

Renovation Plan

『Que Sera, Sera』

—介護する家族が心を開放できる環境づくりを

も少ししか喉を通らない状態となっていた。

坂東さんが立てたリフォームの目標は「家族介護者が抱える悩みを軽減するお手伝い」。具体的には「季節感が感じられるデコレーションをした居間は、友人たちを招くIさんの大好きな場所。その居間を見ながらキッチンに立てるようにすること」「収納を増やし、機能的で整理しやすくすること」も、夜中にKさんがキッチンに入っても心配のないようにすること」などだ。

キッチンカウンターは居間から手元が見えないようにし、コンロはIHに。居間の境にはIさんが飾り付けを楽しめるようアイアンの棚を設置。出窓に棚をつくり、調理器具をすっきり配置しながら取り出しやすくしたほか、カウンターの下にも食材や薬などを収納できる棚を造作した。

リフォームから1カ月後、坂東さんがモニタリングに訪問すると、Iさんはテーブルいっぱいには手料理を作って待ってくれていた。居間にもキッチンにも素敵なインテリアデコレーションが施され、季節を楽しんでいるのが伝わってきた。友人たちを招く機会も再び増え、夫のKさんも夜中にキッチンに入ることがなくなり、安心して眠れるようになったとも。

坂東さんは受賞を受け「今回のリフォームは、Iさんの心を開放する場所と時間を提供することができたと思う。自分らしく生きることが介護の両立をお手伝いするリフォームを、これからも手掛けていきたい」と喜びを語った。



改修後



改修前

くらしの中で「できる」ことを増やし、そして、次に「やりたい」ことに向かっていただきたい、そんな思いをシンボルマークにしました。パナソニックの介護用品で「心身が前向きに、その先に歩みだす」。私らしくいきいきとしたくらしを実現できる社会を創ることそれが私たちの存在意義です。



パナソニック エイジフリー
エイジフリーショップ

お問い合わせ先：営業企画部 06-6908-8122

